中村俊定文庫
文庫 18
554

# 俳諧大風雅

凡例

一風雅の亡魂はうちまく動くく源
重の[illegible]
発足の[illegible]
教訓と拾い集めく章蒙の史
[illegible]

一 [illegible]
[illegible]い化物似真不及者稚犬と云
[illegible]ものとら風雅かゝと
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

彩俳みな四条童の一助なるべし
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一十徐年以前[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一風雅は字面は和歌の貞享式に曰詩歌は
六義といふ漢土の清濁は知り難し朝廷
古今集を度として連歌と混淆せるを
近頃風雅頌比賦興と云風雅頌を経緯
比賦興を緯とする詩の行者の法也
されども古今集の序を和漢共用
別なるべし元和の頃の任ぜ歌を六義
陶淵明云ふ元和の頃の人なり黄白の
陶淵明和奇を好むは世奇とは

中村俊定文庫

是を一字一句は的とあらずといへども自附は俳
諧ならずして推量の沙汰といふべし桃青は是
をもて六くさの差別は風雅頌の三経は世々の
人情を諷諭して閑雎哀楽をとくの道をいひ
王侯士民の心をうつし賦比興の三緯にて
眼前の事物を朗詠して論語文質を富貴が
ごとく身近く事をいふにあらず一てに伸て
そんと妙付を推出して穀水の風雅をそへの
程世様式の優情とのべて詩奇にて王者の
如てわが心をはなして六義の法則といふものなり

元より俳諧は六義にありて切利と人和の二
用より詩奇の発見とも合せて古今その
用をしる時は訓句も俳諧も引奇にて及ぶも
六義にいふ六法是に用ひ和訓のやうやく知らるべき
らるは俳諧の新製にもあらずして和漢の学者
字合せる先は家門の旨にありと
風は訓義風とは諷諭の実にて風言と訓して和奇
には副奇と訓じ是を比興の二つに分けて
其国々の風流を思ひ風情を振副へて差し
むる事風化をはかりて桃青今日風化

とも風俗をもて詩奇れ風俗のうつり上所化を
曰風下所習曰俗とも上以風化下下以風刺
上とも之を行なう時代の風風のうつり連合の体
為蒲の流を汲むうつり其代は流変をもてるのあり
程稽なる和歌の詩多い風俗の二字を連
いく諭言(リトシコト)も詩とくさめる体で俳諧の宗を
なす風律の和多くあるとなる
雅い詩多い雅い正く直くを多い正言(メシコト)と訓也
和多い直言(ムクコト)を詩しくを平仮の徒言(ナビコト)俗
多く俗語を音訓の響を悍也地書をう

風雅の二和を陪生い詩経れるる有りうつり
風い屬多く王を紀り雅い実をもて地を生る
詩風い二多く鑑鏡して乾坤の二色をもう
詩多い和歌多い風雅の字を屋宇の二用と
只て風の字を微雷は屋を見し雅の字を動
善は実を見多くを雅多い雷多の雷を沿て公言(オホヤケコト)
をも詩とくもうい言を用和の例多
一世は雅詩くを多い和歌
右い祖義は貞享或は是を勤う須賦北興の
只行い世を多わうくを写れ作風雅の

市郭と云ふ事は和漢の史書に見えたれども
其の所をいく風雅の大意と知るものなり

一 世に風雅人と云ふものは世の常に勝れ
風雅なる心を以て世に弱くもろく世に
風雅の心を以て人なりの外は世人の弱さ
は奇僻にまさる大病なり又風雅は活奇迷
僻にかたよる事の人情も世の理なるべし
を僻癖とさいひて人に嫌ひ忌はれ
交りなる事を嘗て人を目はなれて己が
家業を捨て行き奇を僻と言ひ人はそむく

一 風雅の市郭と云ふる風雅の法をいふ
たとへば正風とつくる者は市角洲崎々のことく
邪魔外道の中にて千翁風と云者は芭蕉
とて橋向詩とかくに洲崎を守とする者は角風と怪
奇風と云ふを極て他とをそれる橋板濃をいふも
はなはだ変風とも云ふ岩倉の風は芳野江戸にても
風雅の心なり例とこれを喜として同じ様なれど
僻癖とせあやしき人とす僻のかたよりと
自ら人をなるべき安西形にて極なる僻癖
なるべしと邪とは市に知るべの変なり

人に新の奏可あるべきを
風俗の大元と成り奏可の法と
場所を場と成りて助力を新
を者に論じ及ぶ邪人に誘
るの賊なり仏教あるべ
門外と為れの人を世法
律制令に切なる法
問に切なる奏可に
家を切なる法
多しかるに大淳小も
切なるべきを

切なる法を定めるべきを
と昔奏後期に経宮に命じ
身に先を知て為るべ
と宣て天平神護元年
に大師に之切の三年に
世為に十日一紙を
人の為奏事を
切に拘れる義と
の人の下審
交を大切なる人を希有

ことさらに霹小ならぬ懐子といふ一書を述作せら
れて茶ハ誹諧なりとしたりしも芸席の興なき
俳諧と覚えて腑を得す悟らざる者にてなりし
ものゝ世をのかれゐたるものハ付俳諧を評しまいらせ
実にとむさぼり口授のにほひをとりて句を作ると見ん
ものを古句をかりて形とせは立弁ふくに一節の誹
しくハ俳諧にて野郎の茶と唱ふるハ今
誹にハ茶と唱ふるをもつて知らさるへく存じハ
里方の意をなりて自ハ好ありかたらし当風雅の
風とその事口を出さとといふ事に出文芸人の

風雅といふにハなんの俳諧の芸を学ひて
俳諧と云ふ何風と呼事なりなりとも
こそと世人芭蕉翁の俳諧の流をつかさと目
わかてもをく老俳をもて和介も
弁流といふのゆゑありもしそのえと山部を
さ[illegible]をとなへともハ笑て風といふありしや
何との流といふや以へき数行
遂墨の徒もなるよりより老
一 誹の風雅人といふハ侍ハ武気をわすれ
不忠で農ハ耕しを忘れて

土ハ之をもつくら職なるを大るに つけ物と無き
ゆゑんなるべし 豊ハ其の質実の利と 夫人風
雅之道を学ぶ者 其の通弊くるを 詩歌を郷談流
とのみ思ふ事 能せを 流せを 金力を 出すを
也実を 文飾を 風雅兼備 いつれ 人みな
業をこそ 尊ぶべし 雅之実之 能を 弄して
不淫不誇 ハ 義之 文之 風之 風雅 といふ事 也
ことを 別 ある 時 ハ 仕 事 を 以 て 淫 和 の
うつり 出 る 作 也 ことを 以 和 例 とも 作 ハ
一 風雅 をしくとり 古 歌

歌の四とを 仕て 和いて 作 也 ことを 淫 和
ハ 二 を 分 て 淫 と 誇 と 分 る 人 を 詩 を 作 ハ
ハ 二 を 分 る 人 の 歌 の 作 ハ 也 ことを 思 ひ て 風雅 の
作 也 ことを 和 歌 と 云 ハ 也 ことを 思 ひ 違 ふ 也
也 ことを 思 ひ 違 ふ 也 ことを 思 ひ 違 ふ 也 ことを 思 ひ 違 ふ 也
ハ 二 を 分 る 人 を 詩 を 作 ハ 也 ことを 思 ひ 違 ふ 也
作 也 ことを 思 ひ 違 ふ 也 ことを 思 ひ 違 ふ 也 ことを 思 ひ 違 ふ 也
也 ことを 思 ひ 違 ふ 也 ことを 思 ひ 違 ふ 也 ことを 思 ひ 違 ふ 也
ハ 二 を 分 る 人 を 詩 を 作 ハ 也 ことを 思 ひ 違 ふ 也
作 也 ことを 思 ひ 違 ふ 也 ことを 思 ひ 違 ふ 也 ことを 思 ひ 違 ふ 也
也 ことを 思 ひ 違 ふ 也 ことを 思 ひ 違 ふ 也 ことを 思 ひ 違 ふ 也

これを歌うたゝに空（仏）と是を屋と有く
実と行とい系詩の風雅（今）ま、貞徳と人
のたまふ所也

神なびの世風をして月を時に花にあるさ
ま、ふる風雅の新しうして大風雅をもなる
べきなり

不トが信ぶかの句く載る

上をそなわりて秋の富士　作者不知

其角新拾集に載る

名所の月いと四角なりけり　同

此句尽く風雅をもこ図す一の名句なれど
もこれからうさ新しうあるべきなり

いつの世も秋情をいひ出すもの也

いと多き数れ月の名所と呼ひ四角と出る
ものゝ外の月ひとつ格別のものなるべ
き風雅のあるを自暴自棄の足らざるも
風雅のいとなりといふべし

あの山て居宣し秋のうゝ勢　翁

秋のうち流て此旅寝かな　同

呼ぶ鳥もそなわる毛足の面　同

明星をさく宣あるこゝろ　其角

秋風のそなわる俳とも　嵐雪

雲すゝぐこゝろ　珪琳

らくの日課の風雅すなはち多人の自ふ風雅
兼備の日わるてゝうゝ屋ゝゝ

一

風雅とは何ものぞ一異物とねむりの夢
言物とはあめで家人と和合ぞこゝろとしく
西京侍ゝ五論ゝ出師のつく俳諧いるゝてあり
其中作世作ゝ和ゝて人作ゝ出ゝる人ゝ出ゝ
風雅の月一ゝ言ゝ書ゝ詩ゝ書ゝ詩ゝ凝陣せで
よく世ゝ知ゝるゝ人ゝ和光同塵ゝ出ゝ
ゝ千人極ゝ一言夜河ゝ初更の俳諧ゝ

和人の俳諧ゝ人ゝ和ゝ交
多ゝ言葉ゝ和ゝ出ゝ唯異ゝ和ゝ
所ゝ人ゝ書ゝ沖ゝ一部の大言ゝ
ゝ出ゝ俳諧ゝ人ゝ俳諧ゝ
ゝ出ゝ俳諧ゝ書ゝ俳諧ゝ
俳諧ゝ書ゝ出ゝ
出ゝ出ゝ出ゝ
其前ゝ人ゝ人ゝ出ゝ俳諧ゝ
文考ゝ南方俳諧ゝ東西夜話ゝ出ゝ出師ゝ
付伊賀国ゝ俳諧ゝ出ゝ俳者ゝ

平と深しく学びなの素性と知るべし人々俳諧は
正しく書なすと定りあらく世の人の耳に疎
かれしも好むべし隔るべからざると知るべしといへり
古来もさすと深く論じて青若盛れ頭こそ実もて
悔しく也む黄山句浮身も俳諧は心安く存する之
といふすとこともなし土吏なり必らしも求むべき
とまる字ふる懐よりでいふの代にすまとみえこそ人
うかる句と作る可しく人の疑あるぞ知らしめ世
誇らせさるるるは浅く小人の仕業ならむ也と
そのまとく貴ぶ所は風雅の敵なると知るべし

著麪(メン)温羹(ゴカン)碁子麪(キシメン)鶏飯(ケイハン)餢飳(フト)餅なんどの珍しき
喰物も二ッ三ッつゞきてはいかなる人も只平常なる
白飯と香の物には淡さの料理の及ばぬがごとし
一
一生係するが句にて存するも
和も也桂林雅俗安き定なる所の新体を起して
当時は俳諧の人々にて唯果物までもみのらぬ
おもしろは錯とのぞし曠野は紙頭にこひとる切字
でし大原抄と共に深渓の大図と知るめし達の
集も出大坂へてぞうちやり共後西鶴は説
あまたの字彙玉篇なんぞみて後人の古字異字と

穿鑿しむる謌を兼てあしき詞を俳諧のと云て
そのを獨り和歌のみならず自ら俳と絶とする
こともを此集中にそのことを述ずして正雪の
と堂々で清音停止不連歌にて名をいはくの
らびるそくと句も今様の耳すると方哉家末なれ
詞あるは庶民より出たる人の口より出るおかしき俳と俳し
世ぎもし宗匠詞々言葉と出て長き風雅の
本こそ知るを以名付この外る俳諧といふも
そのなし拾遺重粗日梅揃に外ならず中字
そもしの和名集仲に彩他の古社町里の名

或は悪かたことに外れ歌法のやうにゆく俗語に組て来
一首も立る事をなくて云ものいへば作れくはこそ許者徳元
日俳諧も和歌の一躰なれは道あるものとそいふなれ
古先人は此道のうちに見えたる詩并俳を亦人
此年入なく此道へこそまうけるこそ深雪なるこそ
風雅といふは思ひそ君貴人曰和十三歳の昔より
俳諧とはなに風は来事を挑むく七十の今に
和らぐ両辺の外に俳諧あり工夫して内に見ると云
十論為辨抄にも法とあれ之人あまりしくも主論
去へしといふ其合あれは已に無の句論ありて只一ふと

されハ平易となして本支をなす家の中へとゝのはれて
見るも作らしと詩歌連俳ともに地を遣者ハ之なし然れども
由緒ハさのみ何事くもあらず但し水雲者の莫山
句評の序に曰隠の人く出俳に合俳く俳諧を
只地を貴打出して悟るべしとなり

一 俳ハ利益人のつくる俳諧ハ人をしく以ん紀
業を排して余のしとそれをも家をうしなひ人をたすくる
をのぞけてよろしき者とする蕩者業のをとハ抑士
農工商ともに其業を立る者ハ是を曲紀とする
あるといへども俳諧ハいつてかわれ俳諧なるべし

士ハ武義農ハ耕し工商ともにとのへもうけて序
而の職をと勤めしく義を深くして俳ハ限りなく
何義あるもあらとるとも是にて風雅の本意となる
さて旅之歌わく実形く風有て雅す行儀力
何の付ハ其を学ひてはしるをしらんと云ふもらく義を
深く悟るを相之変ね草日俳諧をする好むも俳
諧又ことにいふて詠しとはして俳諧之俳諧ハいふなると
されハ計をけるを立門を用ひも合を唸ふものを
作のも俳諧あるも常の俳諧常の風雅とよく
辨へ知る時ハ人を知りて文を学く出しとあるもしとそ

ともかくも和歌はいかにも風雅にして花実の對
なることをよく味ひ知らずして無益のわざとおもへるや
それゆゑ風雅の花実は此道を別して商家などは
虚にして聊かも利なしと考へつらくも
背く世俗の花の化をみるに有のまゝを守り
初めてきゝよく春来たれども金も出る
議論中で世俗の為に立する所承知して
我ながらに理を見て世にあるといふべし
といふ蒼くそれは君もありて家をなさぬ詞自暴
自棄の甚しくことせぬを尊ぶべしといふべしや

四書六經をはじめ儒釋道神より楊墨列老荘
荀子にいたるまで咄も此書に至るまで皆それぞれ
方便富貴を求めて導く風雅の本意をよく素直
此を立て商の利とし天理の利を非理の貪を
せざるを見とするを皆らぬて天の命をば恐れ
といふ次何やら金欲非道の利を貪らず天
命をはいそのまゝ常に守る所の仮偽
又商家の利といふて謀（ハカリゴト）と計（ハカリゴト）のたくひのたくの謀より
出ると謀といひ偽りより出ると計といふて草紀
言れ様に楠正成のいふく名利長年は謀あるべく

計なく足利直義は計ありて謀なしと云り此二つの
そなはりたる人は商家の者よく工夫せば
天理に叶ふ事なりとぞ

一 俳諧といふは専ら風雅の大事なれば
古人はいふに及ばず今は修する者多くありといふ也
士農工商歌儒仏道にかゝはらず常体のものにあらず
異形なる何をも知らず無にして誉をとるを工夫
しくて只々の邪解と心得て志なり女童の
耳目を驚かして名をあらはさんとすれども誹諧は
皮なるべし文の体に似たる詩文は物さし

俳諧も地をはなれて高き所の理を学ばせんと
思ひ工夫いたし候へども誹諧は愚かしき事をのべ
てよいはかへつて道理の通る事にて高きの道
梅鳥をきて以上雅にて風雅の実を知ると
被誹諧をもて知る事ならずんばあらず
事なり夫ゆへ山深く遊ぶ又人里へ出る
事にて俳人の家を遠ざけまた
実体を好むも心のまゝ差別のなく
道理を心得たる通のなく地名を述べ
語みな階級を経て曲節に告げ

また只一筋に古人の真似をして人を出しぬき
て其病言葉にのみける者は人物にあらぬ
風雅の情を背く事なきは只俳諧の理無かる
べしされば戒めよとて沙弥して手本とて
狛犬のうしろ向きに立てると嘲りしは流と源也
上人徒然草にあるを書にて件を太く恐れし
之衣師十山の流をよしとみて重ても去秋の
桐で候ひし信の仏は本隠流会得の詩の滞く
落居と称する文芸はこれ皆月並で常と唱て
君と相を守るなく只理屈と覚えて

畢竟を撰でみても百員に今句三十三地句なく
格外十七自句十七当句も大概をしてくれぬ
やうて甚だづくも庶民とやう童草日かあれは
わりのりもの常に能書は害をなすとを考へ
もこの他の工夫をするにより千とやうに地の近者
とらへじ諸芸百ふ悩ます深くて利張のなせで
俳諧で俳職の地しも出て風雅の要害は
園かゝし万代不易の喜色体と謂ふ所

一 雅言とやうは貞享或はためし云と訓し論語
ツネニノタマヘフモ
出い津田のてもとりてらにいそとかい雅と風雅言と
ヤサシキコトバ

いふと上品にてうるはしきをいふ詞をも
我国古今和歌集の序にも雅言雅言俗言の別
をそ證なし剰へ平安の鳥山検校といふて
頭に神保の高泰といふ山鳥物ありとうけて謝
謝とある百姓とかる尓雅俗の別は之部の上段
わけ置けとして雅言やさしい夜行の章
にとして俗言なりことなる荘子の胡蝶の夢に
のたとへのてもの四いかならぬを意得して拾遺の
本朝のかなつかひ辻なるといふは五音の理とも知
ぬ人の詞 薬石 鶏卵 野鶏 骨柄などいふは例の

是をねじこび者之二種となし雅言といふ趣をも
また東西南北といふて近からず俗言東南西北と
いふて順ならず雅言としれども常の詞新語学
雅言と見做したる是雅言也ても人了標用なし
然るに世の俗言と見做す支考か高野耕京に
役をつくりて也しきやさしく人に精をといふ
ていふ人とは後をこしいふは風流なるをいふ
是も果は会林節用と是なる愚をせんといふ唯世と
よくかはりてそげ者のすくなきをいふにへに
また此外に方言片言鄙言といふありとて

方言といふハ二三両なりけて越人直させ詞とて其郷はの
わしハ難波の浜荻の如き都合まてそかハしといふと
信濃上野出てハあんぺらといひ甲州にて木實りありていにこせう
といふなどの片言といふハ三味線をシヤミ台所をタイドコ
煙管をスム前垂をナス額合をメンコ某なとをホウコなどいふ
なし 鄙言ハ田舎の言葉にて卑しき節あるといふ信濃あたり
此方てアヒム有ふとデコ浴衣をケンニウ上節ありて負ハ
せるなどいふのあれとこれハ何もなきかたちにて鄙言と

一 詩哥を俳諧にて云ひ人で風雅の神ともよく来く
有けなひまへ人ありもとも風雅と云ふ物ハ詩哥

俳諧なりのと作者一言一句をあけて古今集の
上の和漢の新語を出して若干の助とせ

一 今来ある行山里に道を知る人有朋友の子なく其
親子兄弟なく隣里に至るまで信じ味を比して恩義
ある世を去るハ家振りてよく孝行の道を教へ
ことにかの朋友の子を始めとし信義師に道を語り
さとして語り教へりあるを見て是誠に風律の人
おく浮世の事をも皆是れ古今の事を学びて
風之花之学りし事ハ雅之実を語る風雅人と云ふ

一 治承四年八月廿六日三浦の一族衣笠の城に籠る

今より十年前孫忠寄手あり一陣に引こんで一二の本
元と攻付る之浦兵隆和田義盛ホ之の手にて
矢ぶすまを張(はり)こんで射る孫忠い和(わ)ゝ殺(ころ)
人い退(ひき)ぬ十年(とせ)ゝ人い家退(ひき)の負死人を寄(よせ)て
血祭(ちまつり)に退(ひき)ぬ之浦大(おほ)の兵(ひやう)衛尉孫忠う伯(はく)父(ふ)
付(つき)手(て)さで方(かた)に行(ゆき)ぬ是(これ)を聞(きき)て又戦(たたかひ)に
親(おや)に酒(さけ)と入(いれ)て盃(さかづき)を出(だ)すを是(これ)を見(みて)三(さん)
郎(ろう)殿(どの)に苦(くる)しと謝(しやし)付(つけ)と云(いふ)て又陣(じん)を出(だ)して大(おほ)
戦(たたかひ)ぬ是(これ)まで和(わ)ゝ同(どう)風雅兼備(けびの)やいん

一 三国の末(すえ)に晋(しん)に射陣(しやじん)と呉(ご)の鎮東(ちんとう)軍陸抗

晋の平南都督八年祐う伯(はく)父(ふ)ぬし津(つ)を出(だ)して使(つかひ)
に呉(ご)の一荷(にに)を送(おくる)八年祐(ゆう)伯(はく)付(つけ)る赤(あか)い
酒(さけ)と称(しやう)して毒(どく)を入(いれ)て陸抗(りくこう)に副将(ふくしやう)使(つかひ)
敵(てき)の一カ(いつか)ら送(おくる)の第(だい)と毒(どく)あんと以(もつて)祐(ゆう)を
陸抗い毒(どく)を見(みて)てさの大(おほ)きあるとて大(おほ)
弾(だん)を出(だ)人(ひと)年祐陸抗う病(やまひ)あるとて良(よ)薬(くすり)
を送(おくる)問(とう)に送(おくる)呉(ご)の副将(ふくしやう)毒(どく)を見(みて)必(かなら)ず
飲(のむ)べ使(つかひ)う陸抗と知(しる)て祐(ゆう)に智(ち)勇(ゆう)兼
備(びの)人(ひと)と称(しやう)し極(きわ)めて呉(ご)に毒(どく)を入(いれ)て人(ひと)の
を送(おくる)と付(つけ)て毒(どく)と知(しる)て病(やまひ)と偽(いつわ)て

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

小[illegible]て[illegible]と[illegible]て[illegible]て[illegible]秀俊い[illegible]
[illegible]て[illegible]の[illegible]と[illegible]と[illegible]と[illegible]
[illegible]く[illegible]く[illegible][illegible][illegible][illegible]
のと[illegible]と[illegible]秀俊い[illegible]一時[illegible]
[illegible]て[illegible]け入町[illegible]十三堂[illegible]
[illegible]の[illegible]と[illegible]て[illegible]の[illegible]
[illegible]秀俊[illegible]今[illegible]
[illegible]の[illegible]い[illegible]駆入[illegible]の書
と[illegible]て[illegible]て[illegible]焼[illegible]て[illegible]秀吉
の[illegible]十[illegible]廿[illegible]左馬助い[illegible]あ[illegible]て

木[illegible]の太刀土[illegible]字図[illegible]の刀[illegible]研[illegible]の服[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]堂の
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]秀俊[illegible]の[illegible]
[illegible]自害[illegible]
[illegible]天下[illegible]
[illegible]公[illegible]上[illegible]
[illegible]
[illegible]十[illegible]
[illegible]

仏北今[illegible]陸奥守[illegible]衛の秘蔵の名[illegible]人
のわつく愛せんると[illegible]と自分射給へ大和国
住貴[illegible]の[illegible]名釜と敵
[illegible]と憤て[illegible]
[illegible]といふ[illegible]の遠[illegible]
わ[illegible]

一小杉の[illegible]童[illegible]る所建[illegible]川院の[illegible]
[illegible]いつ[illegible]
[illegible]川院さ[illegible]
の[illegible]

[illegible]く六位[illegible]て仕[illegible]
[illegible]と[illegible]仲保[illegible]人仲保[illegible]
[illegible]く[illegible]
[illegible]と呼し[illegible]
日[illegible]仕[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の仕[illegible]
兼備[illegible]
[illegible]の[illegible]仲保[illegible]秘
[illegible]

焼くて小仲間あると打て勝ち仲間をいく
一馬場せあるを知らずして打ち又
大き情り恨を残さ立会ひ交を動かす諸行
大行き月日一行清平盛衰記を考へ法人の
あるを思ひ出す月日を過ぎ仁心を
元亨と知るものを法味を味はひ
日を考へ出て学と行と学問をかたち
始めの人物川を渡りて出て行かしとき
其外陳和歌の切れ衣の上の句学宿梅の
宿のを勝のかう学ひ宿を問ての此系統

秀の竹藪の梅長谷新信連の小枝の苗を植川を
を進つを入れて考へ敵を防ぐ家勇賊四方
が立梅を動かるを八十字法川の流安信家任
大きく入いて川の養長侍法師言葉の対系の
附の法問大日遠流かの所の流雅波四深
末の和心のを入れ村長川寺家船の日一音と
を多いの法と切る忠義蜀の黄忠を切る
法を行して関羽を延年義衛の庚公之斯が
を入れて行く先を行く子孫を延い法
新和漢を求あげて加を入て入れるを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

安永第九年歳在上章
困敦秋七月念七十二
翁樗陰寓人玉芝書于
極目樓上于時殘暑當
午凝不去如在紅爐中